15世紀のモルッカ・バンダにおける イスラム化と丁香・肉荳蔻貿易

高　橋　　保

Ⅰ．はじめに —14世紀までの丁香・内荳蔻の生産と貿易に関する知見—

東南アジアの特産物として古来、幾つかの香辛料が挙げられるが、本稿で取り上げようとする丁香（cloves）や肉荳蔻（nutmeg）もそれらのうちに含まれており、18世紀まで丁香は世界中でインドネシア東北部のモルッカ諸島（Moluccas）にのみ産出し、一方肉荳蔻もモルッカ諸島に近くそのやや南方に位置するバンダ諸島（Bandas）にのみ産出したのであった。(1) これらモルッカ諸島やバンダ諸島を合せた広義のモルッカ諸島が、別名として香料諸島（Spice Islands）の名で呼ばれたのはそのためである。

丁香や肉荳蔻は、いずれも原産地住民によって消費されることがほとんどなく、その香料—これにはその用途に従って焚香料（lnsence）、香辛料（Spices）、化粧料（Cosmetics）の区分がなされた—としての価値の認識と消費は、もっぱら輸送先の地域において行なわれたところに特色がある。

丁香は中国では3世紀から、ヨーロッパでは7世紀から知られており、一方肉荳蔻は中国では7世紀から、ヨーロッパでは10世紀から知られていたとされるが、とくにヨーロッパではこれらを食物の調味料（＝香辛料）としてだけでなく、家畜の肉や塩魚・乾魚の保存用に、あるいは薬用にも利用したので、その需要はしだいに伸び、とくに北ヨーロッパでは13—14世紀以来急速にこれらに対する需要が増大した。15—17世紀におけるヨーロッパ勢力（ポルトガル、スペイン、オランダ、イギリス）のアジア進出の目的の一つは、この香辛料の獲得と支配にあったとされているほどである。海上による東西交通路をときに

「スパイス・ロード（Spice Road）と呼ぶのもまた、こうした事情によるのである。

ところで、奇妙なことに、こうした重要な香辛料として丁香や肉荳蔻の原産地たるモルッカやバンダについて明確な情報はかなりおそくまで史料に現われなかったのである。世界史上、この地域について初めて明確な記録を残したのは、14世紀前半に活躍した中国人旅行家汪大淵であった。彼は1330—1334年と1339—1349年の2回にわたって親しく南海諸国（東南アジア、南アジア、中東地域）を歴遊して帰国したのち、その後の新情報をも加えて1351年に『島夷志略』を完成したが、(2) 同書には文老古（＝モルッカ）と文誕（＝バンダ）の専条を設けており、各々モルッカとバンダに関する14世紀中葉当時の詳細な情報を提供したのであった。

筆者はさきごろ、これに関して「『島夷志略』にみえる14世紀のモルッカ・バンダ・チモール」と題する別稿を書いたが、そこでは上記の『島夷志略』のモルッカ・バンダ関係記事の分析を中心に、その時代までの丁香や肉荳蔻についての関係史料について検討したが、その結果、大約以下の諸点を明らかにしえたのであった。(3) すなわち、①14世紀前半のモルッカ社会には「酋長」と呼ばれる政治支配者がいて、中国など外部からの商人の到来を希求し、これら到来商人との間に展開される現地産丁香の交易を支配していた。②一方、肉荳蔻や荳蔻花（mace）が多量に収獲されていたバンダでの現地社会における階層分化はモルッカほど進んではいず、まだ「酋長」はいなかったようで、現地住民たちは老人たちによって統率されていたと考えられる。③ジャワ商人などと並んで中国商人たちが、少くとも14世紀前半当時には、現地側の要求に応えて毎年1、2隻の商船によってこれらモルッカやバンダに赴いて丁香や肉荳蔻の買付けに参入していたが、これら中国商人たちはそのための交易品として青磁器などの中国産品やジャワ辺りの商港で仕入れたと思われるインド産やジャワ産の各種布帛などをこの地域に持ち込んでいた。④14世紀前半当時の中国商船のモルッカ・バンダへの渡航ルートについては、彼らが持ち込んだ交易品の種類やその入手地、さらには彼らの檀香（Sandalwood）産地チモール（Timor、『島夷志略』では吉里地悶と記されている）への渡航路などとの関連から考えて、

それは16世紀初頭以後彼らが辿ったと確認できるいわゆる東洋針路（フィリピン経由ルート）によってではなく、いわゆる西洋針路すなわちジャワ島から小スンダ列島を経由するルートをとっていたものと考えられる。

本稿は、こうした別稿での分析のあとを承けて、それに続く時代すなわち14世紀後半からポルトガル勢力がこの地域に到来した16世紀初頭（1612年）までの時期におけるモルッカ・バンダでの社会・文化や原産地から各地の中継港を経て展開された丁香・肉荳蔻貿易の実態について検討しようとするものである。

II．モルッカ諸島交易からの中国商人の撤退とマレイ商人の参入

前掲拙稿で触れた14世紀中葉の『島夷志略』に記載されて以後、14世記後半から16世紀末までの中国記録にはモルッカ諸島に関する記事は全く現われず、17世紀初（1618年刊）の『東西洋考』に至って、その東洋針路諸国（フィリピン・ルートによる到達諸国）の一つに美洛居という名でやっと姿を現わしているのである。このことからすれば、おそらく14世紀末か15世紀初以来中国人のモルッカ往訪は、さきに触れた16世紀初のフィリピン経由ルート（東洋針路）によるモルッカ渡航の例のように時折は行なわれたものの、大勢としてはあまり行なわれなかったものと思われる。バンダ諸島に至っては、『東西洋考』にも全く言及がない。したがって、中国人のバンダ渡海は14世紀だけのことであったと思われる。

では、こうした中国人の香料諸島からの撤退は、どのような事情によるものであろうか。その理由としては、まず中国においてモルッカ・バンダ産香料（丁香と肉荳蔻）に対する需要が少なかった点が考えられる。中国人の丁香の使用は薬用と焚香用であって、ヨーロッパにおけるようにスパイスすなわち調味料としては後代まで用いられていず、したがって中国人の丁香の使用や需要には限界があった。14世紀前半代のように、毎年１、２隻の中国船が渡海して丁香を積んで帰れば、中国の需要には相当期間充分であったであろう。また中国では肉荳蔻に対する需要も少なかった。中国人の肉荳蔻と荳蔻花の使用は、ヨーロッパ人の場合のようにスパイスとしては全く使用しておらず、したがっ

て、少量で充分であった。一方、薬品としては、中国南部各地とマレイ半島産の白荳蔻と小荳蔻類で充分需要は満された。中国本土でこのように需要の少ない丁香や肉荳蔻を、中国商人がわざわざ危険をおかしてモルッカ諸島のような僻地まで遠く航海してまで入手しようとしなくなったのではなかろうか。

あるいはまた、15世紀前半（1405—1433）には中国の官営南海貿易として有名な鄭和の西征（東南アジア・南アジア・中東航海）が7度にわたって行なわれたが、その中国使節団が丁香や肉荳蔻の集散地であったジャワ・スマトラやマレイ半島などの各地にも往訪しているので、そこで充分な量の丁香や肉荳蔻を入手したためであるかも知れない。

さらに、この鄭和の遠洋渡航のような例外を除いて、中国における明代初期から16世紀後半まで海禁政策すなわち中国人による海外渡航の禁止政策の厳格な実施によって、中国民間商人の東南アジア進出が抑制されたことも大きく影響していることも充分考えられる。

ともかくこうして、中国人がモルッカ往訪から手を引いて以後、15世紀を通じてモルッカ香料の輸出を担うことになったのは、従来からこの地域と深い関係をもっていたジャワ商人であり、さらには新たに多く参入してきた新興のマラッカ（Malacca）王国のマレイ商人たちであった。この間の事情については、たとえば、16世紀初に東南アジアに到来し、ポルトガルによる占領直後(1512—15年)のマラッカに滞在したポルトガル人トメ・ピレス（Tomé Pires）がその『東方諸国記』（*Suma Oriental*）で、「昔はマラカ（＝マラッカ）からバンダとマルコ（＝モルッカ）に8隻のジュンコが行ったが、その中の3、4隻はグリシ（＝東ジャワのグリシク）のもので、他はマラカのものであった」と述べ、[4] また「以前は毎年ジャワ人やマレイ人がこれらの島々（バンダ諸島）に航海していた」と記していることや、[5] また同じ16世紀のポルトガル人年代記作者たるジョアン・デ・バロス（João de Barros）が、その『アジア史』第3巻（1563年刊）の中で「これらのシナ人がこれらの島々（＝モルッカ諸島）への航海を続け、この丁字およびバンダの肉荳蔻と荳蔻花を好むようになり始めると、この取引の評判がジャヴァ人をひきつけるようになった。やがてシナ人は取引をやめてしまった。これは思うに、シナの歴代の王がその王国全体に、

同王国の人々は王国の外に航海してはならないという法律を課したからであろう。……時がたつとともに、この東方の通商がジャヴァ人の手に握られ、かれらは東方における航海の支配者となって、シンガプラ市、ついでマラカ市を建設するに至ったが、マライ人もその海峡を航海することによって、この多数の島々へ航海するための領土つまり所有地を手に入れるようになってきた。結局、われわれ（＝ポルトガル人）がインディア（＝アジア）に進出した時には、これらの二つの国民つまりジャヴァ人とマライ人が香料および東方の産物のすべてを（運んで）航海し、そのすべてをこの著名な集散地で取引の行なわれる場所つまりマラカへ運んで来たのである。同地は現在われわれによって占領され、その支配下にあるのである。』と記している[(6)]ところからも明らかである。

マラッカは15世紀初頭、スマトラのパレンバン（Palembang）から対岸のマレイ半島に渡ったヒンズー国家シュリビジャヤ（Srivijaya）王家の１人の王子によって同半島西岸部に建設された王国であるが、この王国は中国・インドシナ諸国・ボルネオなど南シナ海方面諸国やジャワ方面から西方インドに通じる幹線としてのマラッカ海峡の要衝を押えて、急速に国際貿易港として発展をとげた。同国では15世紀中葉（1445年ごろ）に、当時この地域に優勢だったグジャラート商人などムスリム商人との関係緊密化による通商上の利益増大をも考慮した国王（Sultan Muzaffar Shah 在位1445－59）によってイスラム教への改宗が行なわれたが、[(7)]このイスラム化を契機としてそれ以後、とくに15世紀末からポルトガルによって占領される16世紀初（1511年）までの全盛期には、この王国はおそらく当時における世界最大の貿易港として繁栄を誇った。

こうしたマラッカ王国を中心とするマライ人のモルッカ諸島への通航は、15世紀初頭のマラッカ王国の建設直後ではなく、おそらくこの王国がイスラム化を契機に、多数の有力なムスリス商人の來訪を迎え、盛大なる国際貿易港として発展をとげて以後のことであったろうと推察される。というのは、前述したように、明朝によって15世紀前半（1405―1433）に前後７回にわたって行なわれた鄭和の西征に従った馬歡によって書かれた『瀛涯勝賢』や費信の『星槎勝賢』には、爪哇（ジャワ）の産物中に肉荳蔻や檀香のようなマライ群島東方の香料が記録されているが、満剌加（マラッカ）の産物中には見当らず、かつそ

れらの諸書の満剌加の条には明代中葉以後の諸書に見えるような東西の重要交易物資の名がまだ記載されていないからである。

結局、15世紀中葉以後、マラッカのマレイ商人がジャワ商人とともにモルッカやバンダの香辛料取引に参入したことが判るが、彼らがマラッカにもたらした香辛料はこのマラッカからムスリム商人の手でインドや中東地域に運ばれ、さらにはスパイス需要の高まっていたヨーロッパにまでもたらされたのである。

III. 15世紀のモルッカ・バンダ社会と丁香・肉荳蔻の交易

イスラム化したマラッカ王国のマレイ商人がモルッカ香料貿易に参加し始めたことは、香辛料原産地たるモルッカ諸島やバンダ諸島にもその政治・経済・文化の諸側面において重大な影響をもたらすことになった。

残念ながら、現在われわれは15世紀当時のマレイ人やジャワ人の記録の中に当時のモルッカやバンダについての記述を見出すことは不可能であるが、翌16世紀の初頭に至って、モルッカやバンダに到来したポルトガル人やスペイン人たちの記録の中には彼らの到来以前のこれら地域の様相を伝えたものがあるので、以下には、主としてそれらの諸記録によって15世紀末—16世紀初の此地域の社会・文化や香辛料交易について検討することとする。

(A) モルッカ・バンダのイスラム化と社会分化

まずトメ・ピレスのモルッカ諸島の住民や宗教についての記述をみると、

「マルコ(=モルッカ)諸島は丁香を産する5つの島である。…人びとの話によると、マルコ諸島ではイスラム教が始まって50年になるということである。この諸島の諸王はイスラム教徒であるが、その教えに深く染まっているわけではない。大多数は割礼をしていないイスラム教徒である。イスラム教徒は多くなく、異教徒が全体の4分の3以上を占めている。この諸島の人々は暗褐色で、頭髪はまっすぐである。彼らはいつもお互いに戦争をしているが、ほとんど皆が親戚関係にある。」

とあり、[8]同じくポルトガル人デュアルテ・バルボザ (Duarte Barbosa) は同様

の点について、

「アンボン島を過ぎると、5つの島が互いに近接していてモルッコという。全ての島に丁香が生育している。住民は異教徒とイスラムであるが……王たちはイスラムである。」

と記している。[9]

つぎにトメ・ピレスのバンダの社会や宗教に関する記述をみると、

「バンダ諸島の数は6つである。…これらの島には集落があるが、王はおらず、首長（カビラ）や長老たちによって統治されている。海岸に住んでいる人びとはイスラム教徒の商人である。バンダ諸島では人びとがイスラム教徒になり始めてから30年たっている。内陸部には若干の異教徒がいる。これらの島々の人びとは全体で約2500ないし3000人である。」

とあり、[10]デュアルテ・バルボザは、これと同様の点について、

「…これらの島をバンダという。イスラム教徒と異教徒だけが住んでいる。…このバンダ諸島には王がいないし、また何人にも服従していない。ときにはモルッカの王に従うことがある。」

と記している。[11]

いま、これらの記録によると、15世紀末のモルッカやバンダ諸島には、各島の海岸地帯に住むその現地社会上層部を中心に、すでにイスラム化の波が押し寄せていたことが判る。

けだしジャワ島北岸地帯では、すでに15世紀初頭からグジャラート商人などインドのムスリム商人の到来によってイスラム化が進行していたので、モルッカに進出したジャワの貿易商人にはイスラム教徒が多かった。さらに15世紀中葉のイスラム化とともにアジア東部におけるイスラム教の布教中心地と化したマラッカからのマライ商人の此地域への進出は、同時にイスラム教の此地域への拡張をもたらしたのである。

このモルッカ・バンダ地域のイスラム化の時期について、前掲トメ・ピレスの記録によれば、モルッカでは1560年代、バンダでは1580年代ということになり、さらに、バロスの伝えるモルッカ住民の話によると、[12]ポルトガル人の同地域への初渡来（1512年）から80余年前すなわち1430年代ということになり、さ

らに1521年末にモルッカ諸島のチドール島に滞在したマジェラン艦隊の一員アントニオ・ピガフェッタ（Antonio Pigafetta）は当時から50年ぐらい前すなわち1470年代に同地にイスラム教が伝来したと伝える[13]など、諸記録間で一致していないが、大体15世紀の後半と考えておくのが妥当であろうと思われる。

いま、15－16世紀のモルッカ諸島で、チドール島の王とならんで、最も勢威を誇っていたテルナテ島の王がイスラム化した契機について、バロスは「そして（テルナテで）最初にイスラム教徒になったのは、この（1512年当時在世中だった）ボレイフェ国王の父で、人々は彼のことをカシル・デイドレ・ヴォンゲと呼んでいた。そして彼がイスラム教徒になった理由は、あるイスラム教徒だったジャワの身分の高い婦人と結婚したからである。」と伝えている。[14]おそらく、このテルナテ王とジャワのイスラム教徒婦人との結婚は、香料貿易のためにテルナテに到来したジャワのムスリム商人との接触によってもたらされた結果の一つであったであろう。

こうしてジャワやマラッカのムスリム商人との接触を契機にイスラム化した此地域の島々の海岸地帯の住民の中から、各島の「王」と呼ばれるような政治的権力を握り、経済的にも香料貿易を支配すること（後述）によって富裕者となる者を輩出していたが、一方島の内部の住民は依然として異教徒つまり従来通りのアニミズム的信仰を保持する非イスラム教徒であったのであり、彼らは「王」に従属し、経済的にも貧乏であった。

こうした社会階層分化の度合いは、モルッカにおいて強かったが、バンダでは弱かったようである。トメ・ピレスによると、サルタン（Sultan）と稱していた16世紀初頭のテルナテ王は、その宮殿に妻妾合わせて400人の婦人を住まわせており、戦争に行く時は黄金の冠をつけたが、その王子たちも威厳を示すための冠をつけたという。[15]

一方、バンダでは、モルッカにおけるような強大権力者としての「王」はまだいなかったようで、トメ・ピレスによって上掲のごとく首長や長老が住民を支配していると記されているのは、そのことを示していると考えられる。ポルトガル政治勢力到来の直前にこの地域を旅行したイタリア人ルドヴィコ・ディ・ヴァルテマ（Ludovico di Varthema）は、実際に彼がモルッカやバンダに旅行

したかの点についてかなりの疑問は残るものの、[16]その旅行記においてバンダの社会に触れ、「この島では全てのものが住民の共有である。……この島では裁判を行なう必要はない。なぜなら住民は非常に愚直であって、彼らが悪事をしようとしても、それはどうしたらそうなるかということを知らないからである。」と述べ、[17]バンダの住民がきわめて素朴で、彼らはまだ財産の私有観念が存在しないような生活を送っていることを報告している。

なお、モルッカ諸島におけるイスラム教伝来後の文化的変化について、バロスはつぎのように述べている。

「そして（モルッカ諸島で）もしお互いに理解することのできる言葉があるとすると、それはマラッカのマレイ語である。身分の高い人々は今から少し前にこの言葉をよく知るようになった。それはイスラム教徒が丁字を求めてこれらの島々にやって来るようになってからのことである。彼らが来るまでは年を数えたり、重さや貨幣を計算することもなく、また唯一の神とかその他なんらかの宗教の知識も持っていなかった。」[18]

これによると、ムスリム・マレイ商人の到来によるイスラム教の導入とともに、モルッカ諸島では上層社会を中心に文化語としてマレイ語が話されるようになり、またはじめて年数や重量・度量の計算を行なうようになったことが判る。

（B）モルッカ・バンダにおける丁香・肉荳蔻の交易

つぎに15世紀のジャワ商人・マレイ商人たちの到来によるモルッカ・バンダでの香辛料貿易の具体的様相について検討する。

まずマレイ商人たちのモルッカ・バンダへの通航ルートについては、明らかに先に触れた14世紀前半の汪大淵の時代と同様、ジャワ島北岸地方から小スンダ列島を経てバンダ諸島への航路をとっていたことが判る。この点について、トメ・ピレスは次のように述べている。

「以前は毎年ジャオワ（＝ジャワ）人やマレヨ（＝マレイ）人が、これら（バンダ諸島）の島々に航海していた。彼ら（マレイ人）は少量の織物を携えて来て、まずジャオワに向い、そこに立ち寄って大部分の最良の衣類をカイシャ

(＝中国銅銭）や他の粗末な品物と交換に売り払い、そこからシンバワ(＝スンバワ）とビマへ向った。そしてこの２つの島でジャオアから携えてきた商品を売り払った。彼らはこうして（マレイから運び）ジャオアで売り払った品物と、ジャオアから前記のビマ島・シンバワ島に運んでいった品物（の双方）で利益をあげていた。彼らはこれらの島で、バンダンでは高価な織物を買い入れ、バンダンではこれらの織物やジャオワのカイシャ（銅銭）で荳蔻花を買い入れた。」[19]

これによると、マレイ商人やジャワ商人は、ジャワからビマ・シンバワなどの島々を経て、各地で交易を重ねながらモルッカへ赴いたことがわかる。

さていよいよ香辛料諸島に到着したマレイ商人たちは、モルッカでは丁香をバンダでは肉荳蔻・荳蔻花を入手した訳であるが、それは物々交換によっていた。マレイ商人たちが丁香や肉荳蔻の入手のために持ち込んだ交易品について、前掲トメ・ピレスの記録によると、マレイ商人はジャワ産の綿糸布や同地で入手した銅銭、ビマ・スンバワ産の織物などをバンダに持ち込んだとしていた。またトメ・ピレスは16世紀初のモルッカ諸島のテルナテ島で高価な品物すなわち丁香を有利に手に入れる交易品として「カンバヤ産の衣服と粗質と上質の織物、ケリンのあらゆる種類の織物」などインド産織物類を挙げていた。[20]またバルボザは、マラッカやジャワからの商人が丁香入手のためにモルッカに持ち込んだ交易品として「銅・水銀・辰砂・カンバヤの綿布・蒔蘿（ライキョウの一種)・銀・陶磁器・ジャワの金属製の鈴（＝銅鑼)」を挙げ、「銅鑼あるいは大きな陶磁の鉢では丁香20または30キンタル、ジャワの銅鑼（大型）では丁香１バハル」と交換したとしており、[21]また肉荳蔻入手のためにバンダに持ち込んだ交易品として「絹製や綿製のカンバヤの織物、少なからぬ銅、水銀・辰砂・錫・鉛・近東から来る毛織の赤い帽子・大きな鈴（銅鑼)」を挙げ、「住民はこれらの品物の一つ毎に荳蔻花20バハルを与える」と記している。[22]これら15世紀末－16世紀初頭の交易品は、前述した14世紀中葉の『島夷志略』に記されていた交易品――モルッカについて銀・鉄・水綾・綿布・巫崙、八節那澗布・土印布・象歯・焼珠・青瓷器・埕器など、またバンダについて水綾・綿布・花印布・烏瓶・鼓瑟・青磁器など――と多くは共通しているが、若干違うものもある。中国産の陶磁

器やジャワ産の下級綿糸布などは、14世紀以来依然としてこの16世紀初頭にも此地域へ持ち込まれていたようだ。

15世紀末－16世紀初に新たに持ち込まれた交易品として面白いのはジャワ製（おそらくグレシク産）の銅鑼であった。バルボザによると、モルッカの王や上流の人々にはこれを大いに珍重し、それを宝物として保有したという。[23]

またインド西岸のカンバヤ産衣服や綿糸布あるいはマラバール海岸地方産の綿糸布さらにはカンバヤ産数珠玉などインド産品が多く輸入されるに至っている点が注目されるが、それはインドからグジャラート商人などによってマラッカに輸出され、それをマラッカ商人がこのモルッカ諸島に転売したものであった。このモルッカにもたらされるインド産品の種類と量は、綿織物を中心に、つぎの16世紀のポルトガル人の此地域への到来によって、一層増大をみるのである。

さて、こうした交易品を携えてモルッカやバンダに到着したジャワ・マレイ商人は、ピガフェッタの旅行記録にうかがわれるように、島の海岸や船上で、現地の人々との間に土産香辛料との物々交換による交易を行なったわけであるが、トメ・ピレスが「（マレイ商人の）ジュンコ（＝ジャンク）がバンダンに着くと、彼ら（＝マレイ商人）はこの国の支配権を握り、そこにいる間に思いのままにそれ（＝荳蔻花）を買い入れた。……彼らはこの国の人びとに価格を押しつけていたのである。ジュンコの船長（カピタン）たちは、この国の人びとから尊敬されていた。」と記しているところからすれば、[24] この交易では、到来マレイ商人の方が完全に優位に立っており、彼らは現地の人びとから非常に有利な条件（低価格）で香辛料を入手することに成功していたのである。

もっとも、時には到来商人も生産者たる現地住民側の条件をのまなければならないこともあった。それはトメ・ピレスが紹介しているバンダでの荳蔻花の取引きにおいてであって、荳蔻花１バハルの価格は肉荳蔻７バハルのそれと等しかったが、住民側は荳蔻花を肉荳蔻と抱き合せでないと売らなかった。それは「この方法で売らなければ、肉荳蔻が（残って）駄目になってしまう」からであった。少量で高価な荳蔻花を入手したければ、外来商人はその７倍の量の肉荳蔻を一緒に買わなければならなかったのである。[25]

こうした現地での交易の際、現地側で最も重要な役割を演じたのは、いうまでもなく前述した各島の「王」であった。ティドール島に滞在したピガフェッタの記録からみると、ティドール島の王は、王自身はもとより臣下たちを動員して交易用の丁香の調達に当ったのを始め、到来商人のために彼らが運んできた交易品保管用の倉庫を町なかに建ててやり、交易に際しては自分の欲する交易品を優先的に買入れており、そして交易が済むと、外来商人のために祝宴をひらき、彼らの故国への無事帰着を祈るのを習慣としていた。[26] ともかく各島の王は、香辛料貿易における現地側支配者としてその富の蓄積を確実にするとともに、外来商人によってもたらされる新文化の最初の受容者として、その臣下に対して経済的・文化的優位を誇ったのである。

なお、モルッカ諸島・バンダ諸島住民のうち最も航海術に長じていたらしいバンダ人が、15世紀にはモルッカへ渡航して丁香を入手して帰り、それをマラッカからバンダに渡来してきたマレイ商人に売り渡していたことが伝えられている。この点について、フェルナン・ロペス・デ・カスタニェーダ（Fernão Lopes de Castanheda）は次のように述べている。

「モルッカ諸島の住民は戦争以外の船をもっていない。……彼らは丁香を輸送する船を持たないから、彼ら自身で外部に丁香を搬出していない。バンダの住民は、彼らのジャンクでモルッカへ渡り、丁香を求めている。彼らバンダ人はマラッカの商人がバンダへ舶載してきた衣服用のインド産織物をもって丁香を非常に安い価格で買う。そしてマラッカの商人は、バンダでこのインドの織物で、肉荳蔻・荳蔻花・丁香を買い入れ、丁香のためにモルッカ諸島へ渡ろうとしない。なぜなら、モルッカとの航海に、彼らがマラッカからバンダへの往復に要する6ケ月の期間のほとんど2倍の時日を費すからである。」[27]

つまり、モルッカ産丁香の一部分はバンダで中継されて外部に輸出されていたわけである。これはおそらく、マレイ商人の渡来により、彼らに便宜を計ればいくらかの利益が生まれるという事実に教えられ、バンダ人が小舟を利用してモルッカとの間に航海を行なったことを示しているのであろう。しかし、強力な政治権力と軍事力をもつモルッカの王のある者が、こうした事情を見逃す

はずはない。したがって、バルボザが前掲の記録の中で、バンダはときにはモルッカの王に従うことがあると記していたように、たとえ一時的にせよ、モルッカの王がその海上支配力をバンダにまで伸ばしたことがあったことは充分推測されるところである。

Ⅳ. 15世紀末－16世紀初の丁香・肉荳蔻貿易における マラッカとグジャラートの地位

さて、15世紀末－16世紀初当時、モルッカ産の丁香やバンダ産の肉荳蔻・荳蔻花などがどれほどの量どこへ輸出されていたのだろうか。

モルッカ諸島での丁香の収穫量について、トメ・ピレスは年間総量約6,000バハルと云っているが、[28] ディオゴ・デ・コウト（Diogo de Couto）が『アジア志』に「丁香4,000バハル、帯枝丁香では6,000バハル」と述べていることからすれば、[29] これは枝（ステム）をつけたままの丁香の量であったと考えられる。これをマラッカの目方すなわちバハル＝195.717キログラムで計算すると、約1,170トンということになる。モルッカ諸島住民が丁香を消費することはなかったから、その収穫されたほとんど全量が島外の世界各地へ輸出されたのである。前掲の14世紀中葉の汪大淵の時代におけるモルッカ丁香の生産量は不明であるが、14－15世紀の北ヨーロッパでの香辛料の需要増加によって、モルッカの丁香輸出も汪大淵の時代よりも一層増大したものとみて間違いあるまい。

つぎにバンダ諸島での肉荳蔻と荳蔻花の年産額はどれほどであろうか。トメ・ピレスは毎年平均して肉荳蔻は6,000－7,000バハル、荳蔻花は500－600バハルとれると云っているが、[30] この数値はやや過大にすぎるようで、のち（16世紀中葉）にモルッカに久しく滞在したスペイン人ファン・パブロ・デ・カリヨンの掲げる数量が事実に近いと思われるが、それによると、肉荳蔻は450－550バハル、荳蔻花は67バハル弱ということになる。[31] これらの肉荳蔻・荳蔻花も、丁香の場合と同様、そのほとんど全量が輸出されたと思われる。

（A）東南アジアにおける丁香・肉荳蔻貿易中心地としてのマラッカ

こうしたモルッカ・バンダ産の香辛料の輸出先として、まず重要であったのは前述のマラッカである。

ポルトガル艦隊による武力占領の直前に当る1510年2月6日付で、マラッカに捕虜として滞在していたポルトガル人ルイ・デ・アラウジョ(Rui de Araújo)がアフォンソ・デ・アルブケルケに宛てて書いた書簡の中で、同年マラッカ商人が3隻の船でモルッカ・バンダから肉荳蔻・荳蔻花（数量は不明）とともに、4,000ないし4,500バハルの丁香を運んで来るようだとの推定を記しているが、[32] この丁香の量は、前述のコウトの記述からみて、当時のモルッカ諸島の年間平均丁香生産量の全量に近く、これは当時のマラッカがモルッカ産丁香輸出の中継地としてその大部分の量を取扱っていたことを意味するものと考えられる。バンダ産の肉荳蔻・荳蔻花についても、おそらく同様の状況にあったのではなかろうか。

1505年にマラッカを訪れたヴァルテマが「世界のどんな場所よりもここに到着する船の数が多く、とくにここにはあらゆる種類の香辛料や他の莫大な量の商品が来る、と心から信ずる」と書いているように、[33] 当時国際貿易港として全盛期にあったこのマラッカの繁栄は、主として同地に集まってきた外国商人たちの活躍に負っていた。商人たちの出身地は、マラッカを中心として放射状にあらゆる方向に及んでいた。彼らのうちにはマラッカに長期滞留する者も多く、これらの居留民の中からマラッカ王国の官吏としての4人の港務長（シャーバンダル Shābhandar）が選ばれて、関税の納付をはじめ商品価格の決定や商人間の争いの調停などに当っていた。彼らには各々地域の分担が決っていた。その第1はインド西北岸のグジャラートの代表で、これが4人のうちで最も重要な地位を占めていた。第2はインドの他地域人すなわちコロマンデル人やベンガル人それにペグー人およびスマトラのパセイ人らの代表であり、第3は東南アジアの島嶼部すなわちジャワ・モルッカ・バンダ・パレンバン・カリマンタン・フィリピンなどの諸地域の商人の代表であった。第4が中国人・インドシナ沿岸諸国人および琉球人の代表であった。風向きによって外国各地からの船の入港時期やまたその出航時期は異なるものの、マラッカ港には年間を通じて

船の絶える時がなかった。

これらの貿易商人のうちで、最もめざましい活躍を示したのは、西方のインド商人と東方のインドネシア商人であった。それはこのマラッカを経由して西から東へ動くインド産綿織物と東から西へ運ばれるモルッカ・バンダ産香辛料という当時の二つの重要貿易商品の流れにまさしく対応するものであったと云える。

トメ・ピレスは、15世紀末－16世紀初頭のマラッカから毎年モルッカ・バンダの香辛料の買付けに赴いた8隻の商舶の船主について「その中の3、4隻はグリシ（＝東ジャワのグレシク）のもので、他はマラッカのものであった。マラッカのものはシャティンの商人クリア・デヴァのものであり、グリシのものはパテ・クスフのもので、彼は同地で取引を行なっていた。この他にジャワ人やマレイ商人も加わっていたが、この2人が主要な商人で、2人ともこの取引で多量の黄金を入手した」と書いている。(34) これによると、この当時マラッカ――モルッカ・バンダ間香辛料貿易に参加していた最も重要なマラッカ在住商人2人のうち、1人はインドの東海岸コロマンデル地方出身のインド商人クリア・デヴァであり、他の1人はジャワ島東部北岸のグレシクの領主の息子がマラッカに滞留して貿易に従事しているうちに、マレイ婦人との間に生んだ男子で、父と同様に貿易に従事したパテ・クスフというものであったことが判る。この両者はモルッカ・バンダ諸島との香辛料貿易で莫大な利益をあげていたことはいうまでもない。

さて、東方の原産地からまず中継地マラッカにもたらされた丁香や肉荳蔻といった香辛料は、その一部がスマトラやジャワ産の胡椒など他の香辛料とともにマラッカから中国へ輸出されたことは、前掲1510年2月6日付でマラッカから出されたアラウジョの書簡に

「シナ人はかれらの来るのに最も適している時期、つまり4月に来ます。そして当地（マラッカ）から自分の国に向かって5月と……に出発します。同地に行くためには、2、30日、同地から来航するためにも同じ日数を要します。かれらは、……、麝香、緞子、品質の悪い繻子、コルニジャン（欝金の一種）、樟脳、若干の硫黄、非常に良質の……、真珠母、それに明礬を持っ

て来ます。毎年８隻ないし10隻のジュンコがやって来て、多量の胡椒と若干の丁字を自分たちの国に持ち帰ります。」

と記されている[35]ことからも明らかである。当時中国の商船は、中国からマラッカに各種絹織物や陶磁器その他上掲の品々を持ち込み、代りにマラッカから東南アジア産香辛料やインド（とくにグジャラート）産の綿布などを持ち帰っていたのである。しかし中国へ運ばれた香辛料は胡椒以外はごく少量で、大部分の丁香・肉荳蔻はこのマラッカからインド西岸部を経由し、さらに紅海を経（あるいはペルシャ湾を経て）、アレキサンドリアからヴェネチアへと至る東地中海経由の幹線香辛料貿易ルートにのせられて、当時香辛料に対する需要が著しく増大していたヨーロッパに向けて送り出されたのである。この意味で、マラッカはヨーロッパへの丁香・肉荳蔻供給路の最初の重要関門であった。トメ・ピレスが「マラッカの支配者となる者は、ヴェネチアの喉に手をかけることになる」と云ったのは、[36]このためである。

（B）インド洋における丁香・肉荳蔻貿易中継地としてのグジャラート

さて、当時のこのマラッカから以西のインド洋での国際貿易をみると、紅海入口のアデン（Aden）やペルシャ湾のオルムズ（Hormuz）に至るまでのこの貿易路を牛耳っていたのは、インド商人なかんずく西北インドのイスラム国家グジャラート（Gujarāt）王国（主要港市カンバヤに因んでカンバヤ王国ともいわれた）の商人たちであった。この点について、トメ・ピレスも

「カンバヤに住んでいるグザラテ人と居留民とは、多くの船をあらゆる地域に航海させている。すなわちアデン、オルムズ、ダケン王国、ゴア、バティカラ、マラバル全土、セイラン、ベンガラ、ペグー、シアン、ペディル、パセー、マラカに向けてであって、そこに多くの商品を運んでいって、他の〔商品を〕持ち帰る。したがって、かれらはカンバヤを豊かに、また立派なものにしている。とくにカンバヤは２本の腕を伸ばし、右手でアデンを握り、一方の手でマラカを握っている。これは重要な航路であって、他の場所への航路はそれほど重要ではない。」

と述べて、[37]彼らグジャラート商人のインド洋貿易での優位性を指摘している。

彼らグジャラート商人がマラッカへのインド綿織物の輸出と同地からの丁香・肉荳蔻のインド洋方面への輸出の主要担当者であったのであり、マラッカ王国の4人のシャーバンダルのなかで最高の地位を占めていたのが彼らグジャラート人であったことはすでに触れたところである。トメ・ピレスは「昔はマラカには1,000人ものグザラテ人がおり、その他に、常に往来しているグザラテ人の水夫が4,000～5,000人もいた。」と記している。[38] 1510年の前掲アラウジョのマラッカからの書簡によると、当時のマラッカでの丁香や肉荳蔻の価格は、同地へのグジャラート商人の渡来の有無によって、大いに変動したのであった。[39] マラッカとグジャラートの関係は「マラッカはカンバヤなくしては生きてゆかれず、カンバヤもマラカなくしては豊かに繁栄することはできない。」[40] といったような、きわめて緊密かつ相互依存の状態にあったのである。

一方、グジャラート商人たちがインド洋西端で紅海入口に位置する都市アデンにおいても、その貿易相手として重要な地位を占めていたことは、トメ・ピレスがアデンについて触れた際に「またカンバヤと取引して、カイロの商品と阿片とを携えて行って、多量の織物――かれらはそれでアラビヤや島々と取引する――、種子、ガラス玉、カンバヤの数珠玉、多量の各色の玉髄およびとくにマラカの香薬、丁字、肉荳蔻、荳蔻花、白檀、キュベプ（＝ジャワ胡椒の実）、真珠母およびこれと同じような品々を持ち帰る」と述べていることからも明らかで、[41] これによるとグジャラート商人たちは、マラッカから故郷グジャラートに自分たちが輸送したモルッカの丁香やバンダの肉荳蔻・荳蔻花をはじめとする東南アジア産香辛料を、さらにグジャラートに到来するアデン商人たちに転売していたことがわかる。勿論、グジャラート商人が直接彼らの船でアデンにこれらの商品を輸送していたことは、すでに触れたとおりである。カンバヤをはじめグジャラート王国の海岸諸都市には、カイロやアデンやオルムズからの商人の居留者がおり、大きな取引をグジャラート商人との間に展開していたのである。[42]

またピレスによって「オルムズの人々はカンバヤに馬・銀・黄金・生糸・明礬、礬類、緑礬・真珠母を運んできて、土産の商品およびマラカから来た商品を持ち帰る。なぜならば、マラカとの取引というのは、（マラカの）商品を求

めてカンバヤに来ることであったからである』と記されたように、[43]カンバヤに到来するオルムズ商人たちは、カンバヤにおいてマラッカから転送されてきた香辛料類を入手するのを主目的としていたのである。これら丁香などのマラッカ商品が直接グジャラート商人によってもオルムズに運ばれることがあったことはいうまでもない。

こうして、モルッカの丁香やバンダの肉荳蔻・荳蔻花といった香辛料は、その生産量の大部分がマライ商人やジャワ商人の手でマラッカへ運ばれたのち、その一部は東アジア・東南アジアの各地へも流れたが、かなりの部分はグジャラート商人によってインド洋西岸地方へ運ばれ、インド各地でも消費されたが、残りはグジャラートからさらにグジャラート商人やアラブ商人によって紅海方面のアデンへ、またペルシャ湾方面のオルムズへと転送され販売されて行ったのである。

（C）中継貿易港カリカットにおける丁香・肉荳蔻の価格

以上のように、マラッカに次ぐインド洋上の丁香・肉荳蔻貿易路の重要中継地は、イスラム教徒グジャラート商人の故郷であるインド西北岸のグジャラート王国地方であったが、また同じインド西岸の貿易都市としてはゴア（Goa）やマラバル海岸のカリカット（Calicut）やコチン（Cochin）などがあった。なかんずくカリカットは16世紀初頭においてインド洋上における仲継貿易都市としてきわめて重要な地位を占めていた。その付近のマラバル海岸は重要な香辛料の一つである胡椒の原産地でもあった。1498年にアフリカの喜望峰経由でポルトガルのヴァスコ・ダ・ガマ（Vasco da Gama）がはじめてインドに到着した際、最初に交渉をもったのもこのカリカットであった。

16世紀初頭当時のカリカットは、マラバル海岸地方随一の港市で、東方のマラッカとは勿論、西方ではアラビア半島で紅海入口に位置するアデンなどとも直接交易して重要な中継貿易地となっていたことは、トメ・ピレスが「かれら（＝アデン商人）はまたインディアのマラバルと取引して、――同地ではかれらは重要な根拠地をカレクト（＝カリカット）に持っていた――胡椒や、生姜や、マラッカの品物を積荷していた』[44]と述べていることからも明らかである。

カリカットの港にはまた、ペルシャ湾入口のオルムズからも商船が取引のために入港し、南インドの胡椒や東方からの丁香・肉荳蔻をふくむ「あらゆる種類の香薬」を持ち帰ってペルシャやアラビアの各地へ転売していたのである。[45]「当地（＝カリカット）には多くの国が大きな商館をもっていた。それぞれの国はその商品を当地に持って来て、ここで大きな取引きや物々交換や両替が行なわれていた」のである。[46] これらの史料によると、16世紀初頭当時のカリカットからアデン向け、およびカリカットからオルムズ向けの香辛料貿易は、各々主としてアラブ商人が自分たちの船で行なっていたことが判る。

グジャラート出身のムスリム商人たちは、出身地たるグジャラート地方においてのみならず、16世紀初頭当時このカリカットなどの都市においても、地元商人やアラブ商人たちに混って、貿易商人としての実力を大いに発揮していた。たとえば1500年ごろのカリカットで、その地域最良の家はグジャラート地方出身のムスリム商人の持家であったとされるが、[47] これはグジャラート商人がこの商都カリカットでも実業界で支配的地位を誇っていたことを意味するものと考えられる。彼らはマラバル海岸地方産の胡椒をここからデカン地方の諸港や故郷グジャラート地方に転売したし、またこのカリカットに丁香や肉荳蔻などをマラッカから輸送するについても、現地のカリカット商人などと並んで彼らグジャラート商人が重要な役割を担ったに相違あるまい。

いま、このカリカットでの16世紀初頭の丁香や肉荳蔻の取引価格を示す貴重な記録があるので、これについて触れておきたい。それはポルトガル人バルボザが記録しているものであるが、ポルトガル人到来以前の記録には香辛料の価格について記す資料がほとんどなく、また初期ポルトガル人たちもその香辛料貿易の内容を秘密にしていたので、当時の香辛料の取引価格についての記録を見出すことはまことに困難であり、この点からもバルボザの記録は貴重なものと云わざるをえない。

バルボザはまずモルッカ諸島産丁香の価格について、つぎのように記している。すなわち、丁香は原産地モルッカでは、渡来購入者の人数などによって変動はあるものの、1バハルが1ないし2ドカドであり、マラッカ市場では10ないし14ドカドで売買される。そしてインドのカリカットでは1バハルが500な

いし600ファノンであるが、非常に精選された清浄品ならば700ファノンしている、と。[48] この記事のドガドはヨーロッパの貨幣単位で、ポルトガル人が便宜上自国の貨幣単位クルサードに換算して記載したものである。ファノンはインドの貨幣単位で、1515年当時インドで1クルサードすなわち1ドカドは17ファノンであったという。いまこの率で計算すると、500ファノンは30ドカド弱、600ファノンは35ドカド強、700ファノンは41ドカド強となる。以上のことから、丁香の原産地モルッカでの取引価格を基準にして考えると、マラッカでの取引価格は大体原産地価格の10倍以上となり、さらにインドのカリカットでの価格は原産地価格の30倍以上であったということが判る。

つぎにバンダ諸島産の肉荳蔻の価格について、バルボザは次のように記している。すなわち原産地バンダでの肉荳蔻の価格は1バハルが8ないし10ファナム、荳蔻花は1バハルが50ファナムであるが、一方インドのカリカットの市場では肉荳蔻1ファラゾラ（＝20分の1バハル）の価格が10ないし12ファナム、荳蔻花1ファラゾラの価格が25ないし30ファナムである、と。[49] なおバルボザはマラッカでの肉荳蔻の価格については記録していない。したがって、以上のことから、カリカットでの肉荳蔻の取引価格は原産地バンダにおける価格の20ないし25倍、荳蔻花のそれは40ないし50倍に達していたことが判る。

いずれにしても、バルボザのこの記録による限り、商品としての丁香や肉荳蔻は、その取引きにたずさわったマレイ商人やジャワ商人、さらにはグジャラート商人など貿易商人たちに莫大な利益をもたらしていたことは間違いないところである。

V．おわりに　―イスラム国家としてのマラッカ王国―

本稿でも屢々引用してきたように、ポルトガル人トメ・ピレスは南アジア・東南アジアでの自らの現地体験に基づいて、16世紀初頭のアジアの地誌についてきわめて貴重な記録を我々に残しているが、その彼が当時における丁香や肉荳蔻それに白檀といった香料の産地について「マラヨの商人は、神はティモルを白檀のために、バンダンを荳蔻花のために、マルコを丁字のために創られた

ので、これらの島々を別々にするとこの商品のある所は世界のどこにもないと語っている。私はこれらの商品がどこか他の場所にないかどうかを熱心に質問したり訊ねたりしたが、誰もがそういう場所はないと云っている』と記している。[50] まさしく丁香はモルッカの、肉荳蔻はバンダの特産品だったのである。

さて、こうした辺境の原産地から、15世紀末－16世紀初において、丁香や肉荳蔻の他地域への輸出を担当し中継貿易都市マラッカにそれらを運んで莫大な利益をあげていたのはマライ人やジャワ人などのイスラム商人たちであり、マラッカでそれらを買付けて同地以西のインド洋諸地域に転売していたのは同じイスラム教徒のグジャラート商人たちであったことは、すでに触れた。マラッカからはまた、中国や東南アジアの近隣諸地域へも、これらの香辛料が転送されていった。

マラッカには、このようにアジアの各地から多数のイスラム教徒を中心とした商人たちが集まり、同市は当時の東南アジアにおける最も重要な貿易都市であったことは間違いないが、このマラッカを首都としていたマラッカ王国とは一体どのような政治経済構造と特徴をもった国家だったのであろうか、以下この点について少し検討しておきたい。[51]

15世紀末－16世紀初のマラッカでは、国王以下がイスラム教を信仰し、住民にもイスラム教徒が多数いたようであるから、この国をイスラム国家とみなすべきであろうが、その政治支配構造という点では他地域のイスラム国家と大きく異なっていた。すなわち西アジアやインドのイスラム国家ではイスラム教的官職――行政面ではディーワーン系統あるいはアミール、宗教面ではカーディーなど――が重要な役割を果たしていたし、また国内でのイスラム教徒と非イスラム教徒との政治・経済・社会上の処遇の差異が無視できない問題となっていた。これに対して、マラッカ王国においては、その官職名にも伝統的なヒンズー的名称が多く、スルタンを除いて重要な宮職にイスラム系のものは存在しなかった。宗教的な職名がごく少数知られるが、それもイスラム世界本来の職と異なって、一般の文官的役割を果していた。またイスラム教徒と非教徒との間にも、社会的差別などの問題があったことを示す記録はない。

こうしたイスラム国家的性格の稀薄な点は、マラッカのイスラム化の歴史が

短かかったためであるというよりは、むしろ過去にヒンズー化の波を強く長期間にわたってうけてきた東南アジア地域に受容されたイスラム教の特殊性によるものと考えた方がよいのではなかろうか。イギリスの東南アジア史家ハリソン（Brian Harrison）はこの問題に関して、マラッカ国王が「イスラム国家になったという事実は、それが過去と完全に断絶してしまったことを意味してはいない。もっと以前のインド化した諸国から継承した諸々の伝統の合成物は、そう簡単に拭い去ることはできなかった。多くの点で、――宮廷儀式のヒンズー的特徴において、海峡を支配するために用いる戦争と商業とをおりまぜた手段という点で、中国への外交的忠誠の維持において――マラッカはこの東南アジアという十字路にあたる地域に成長していた、奇妙に混じり合った諸伝統を積み込む最新の車にすぎなかった。」と述べている。[52] いずれにしても、マラッカ王国においてこのようにイスラム国家的性格が稀薄な政治的支配構造がみられることは、イスラム教徒が優勢だった外来住民がマラッカ王国の政治にほとんど関与しなかったという事実と大いに関連があるものと思われる。

一方、マラッカ王国の国王や貴族たちが貿易に直接に従事したことを示す記録はほとんど見当らない。トメ・ピレスには、マラッカ王国の高官・貴族たちがマラッカ港に到来した外国貿易商人から収奪すること、商人たちは貴族に多大の贈物をすることが記述されている。[53] これは、マラッカ王国の高官・貴族がみずから貿易に参加することなく、自国の港に出入する貿易船の利得に寄生的になっていたことを示すものである。

マラッカ王国の支配層は、自国での貿易の繁栄をもたらすために国王以下がイスラム教に改宗し、イスラム教徒が優勢だった外来貿易商人への優遇策をとった。トメ・ピレスの記録の中に、国王マンスール・シャー（Mansur Shah、在位1459－77）のころ、外来商人に対して自由主義的な態度を示し、商品税を低くするとともに、港の治安維持に努めたから、内外の商人に好感をもたれ、その結果として、国王は多大の財富を蓄えることができたという記述があるのは、[54] そのことを示している。

このように、自からは直接に通商活動を行なわないことで、有力な艦隊を保持して港と航路の安全保護に専念するというマラッカ王国政権の政策は、外来

商人の側からみると、多少の税金と付加的な贈物を差し出すほかは、現地の有力者と通商上の競争をしないですみ、貿易活動の安全を保障されることになり、非常に望ましいことであったと思われる。

前述したマラッカ王国でのシャーバンダル（港務長）制の存在は、外国商人がマラッカ王国の官吏に任命された例外的事例であった。シャーバンダルの地位は低かったが、彼らは現地貴族と外来商人との間にあって、外来商人を保護する外国領事的役割を果すと共に、外国貿易に寄生的な貴族の利得を媒介した。したがって、その職務は外国貿易の盛衰に直接関わるものであるため、シャーバンダルには外国商人の有力者が登用されたのであろう。

以上のようにみてくると、マラッカ王国には、直接には通商活動をしない国王・貴族の政治支配と、政治に関与しないでもっぱら経済面で支配的な活動を行なう外国系貿易商人とが存在し、いわば支配層の二元構造が認められたのである。この両者はマラッカ港の海上貿易が繁栄することによって、共に利益を得るわけで、相互依存の関係で結ばれていた。

当時の東南アジアには、典型的な農業国家のほかに、幾つかの通商国家とも呼ぶべき国家が存在したが、これら通商国家にも２つの型が存在したと考えられる。[55] すなわち、その１つは国家の政治的支配層がみずから通商活動を行なうもので、タイのアユタヤ（Ayuthia）王朝などがその例である。この型の国家では政治的支配者が経済活動を行なうために、貿易の国家独占制にいたることが普通であった。これに対して、他の１つの型は政治権力者がみずからは通商活動をせず、その支配地域内の通商の利益に寄生的な関心を示すもので、自領内の外国貿易が繁栄するように各種の努力をするが、とくに外国商人を誘引する最大の手段として、貿易上に自由主義的な政策をとる傾向が認められた。マラッカ王国はこの型に属し、その貿易振興政策が見事に成功した例にほかならない。

こうしたマラッカ王国の貿易振興政策の成功によって、15世紀末における東南アジア地域での海上通商パターンは、その１世紀前に比べて大きく変っていた。[56] すなわち、1400年ごろには、中国のジャンクがマラッカ海峡を越えてインドの西海岸やそれよりもさらに西の地域を訪れていたし、アラブ船もマレイ

半島より以北に達して中国の広州に寄港していた。しかし、1500年ごろには、マラッカがかなりはっきりした境界線となっていて、中国ジャンクがそこから西に行くこともなくなり、またイスラム教徒の船が中国に向けて航海することもなくなっていたのである。グジャラートのムスリム商人たちも、15世紀にマラッカが発展すると、かつてのようにマラッカ以東に行ってジャワ島北岸地帯などで貿易していたのをほとんど止めてしまい、中国産品やインドネシア産品をマラッカにいる自分たちのところへ運んでこさせるほうを選んだのであった。

なお最後に指摘しておきたいのは、15世紀末－16世紀初におけるマラッカ周辺の海上貿易ルートには、優勢なイスラム商人のほかに、非イスラム商人も活躍していたという事実である。すなわち、マラッカ―グジャラート―アデンという大幹線ルートを往来する商人の大部分はイスラム教徒であったが、インド東海岸のコロマンデルやベンガル、東南アジアのインドネシアおよび東アジアの中国などを起点とする支線ルートを経由する海上貿易は、その多くが非イスラム教徒によって展開されていたのである。当時のわが琉球船によるマラッカ通商も、その一例と考えられよう。

注

(1) 丁香と肉荳蔻の生産地や香辛料としての特徴については、さし当り下記文献を参照されたい。山田憲太郎『東亜香薬譜―スパイス・ルートの研究―』東京、法政大学出版局、1982年、312－313、380ページ。

(2) 杉本直治郎「『忘れられたる帝国』その他に拾う―汪大淵に関することども―」『東南アジア史研究Ⅰ』東京、日本学術振興会、1956年、579－602ページ。

(3) 高橋保「『島夷志略』にみえる14世紀のモルッカ・バンダ・チモール」『東西交渉』第27号、1989年4月刊行予定。

(4) Armand Cortesão, *The Suma Oriental of Tomé Pires and the Book of Francisco Rodrigues*, 2 Vols., London, 1944. Works issued for the Hakluyt Society, II, No.89, 90. 生田、池上、加藤、長岡訳注『トメ・

ピレス　東方諸国記』大航海時代叢書Ⅴ．東京、岩波書店、1966年、357ページ。

(5) 同上書、350ページ。

(6) João de Barros, *Asia de João de Barros dos feitos gue os Portugueses fizeram no descobrimento e conquista dos mares e terras do Oriente.* Decads Ⅰ－Ⅳ. Lisboa, 1552－1612. 4 Vols. Vol.Ⅲ－Ⅴ－5．邦訳は渋沢訳生田注『ハウトマンおよびファン・ネック　東インド諸島への航海』大航海時代叢書、第Ⅱ期Ⅹ、岩波書店、1981年、補注525－526ページ所引による。

(7) Kok Koun Chin, *History of Malaya,* Kuala Lumpur, Oxford University Press, 1978, p.13.

(8) 前掲『トメ・ピレス　東方諸国記』355－357ページ。

(9) Duarte Barbosa, *Livro de Duarte Barbosa, in Collecção de Noticias para a História e Geografia das Nações Ultramarinas, que vivem nos Dominios Portuguezes ou les são visinhas.* Tomo Ⅱ. Lisboa, 1812, pp.231－394. 邦文は前掲山田憲太郎『南海香薬譜』357ページによる。

(10) 前掲『トメ・ピレス　東方諸国記』347－348ページ。

(11) 前掲山田『南海香薬譜』399－400ページ。

(12) 前掲『ハウトマンおよびファン・ネック　東インド諸島への航海』補注526ページ。

(13) Antonio Pigafetta, *Relazione del primo viaggio intorno al mondo, a cura di Camillo Manfroni.* Milano, 1928. 邦訳は長岡訳「マガリャインス最初の世界一周航海」『コロンブス・アメリゴ・ガマ・バルボア・マゼラン　航海の記録』大航海時代叢書Ⅰ、岩波書店、1965年、631ページ。

(14) 前掲『ハウトマンおよびファン・ネック　東インド諸島への航海』補注526－527ページ。

(15) 前掲『トメ・ピレス　東方諸国記』361ページ。

(16) 高橋保「東南アジアを訪れたヨーロッパ人旅行者たち――マルコポーロからルドヴィコ・ディ・ヴァルテマまで――」『東西交渉』第26号、1988年7月、49ページ参照。

(17) N. M. Penzer ed., *The Itinerary of Ludovico di Varthema of Bologna from 1502 to 1508.* The Argonaut Press, 1928. p.88.

(18) 前掲『ハウトマンおよびファン・ネック　東インド諸島への航海』補注526ページ。

(19) 前掲『トメ・ピレス　東方諸国記』350ページ。

(20) 同上書、362ページ。

(21) 前掲山田『南海香薬譜』357ページ。

(22) 同上書、400ページ。
(23) 同上書、357ページ。
(24) 前掲『トメ・ピレス　東方諸国記』350ページ。
(25) 同上書、351ページ。
(26) 前掲『コロンブス・アメリゴ・ガマ・バルボア・マゼラン　航海の記録』610－612、619ページ。
(27) Fernão Lopes de Castanheda, *História do descobrimento e conquista da India pelos Portugueses.* Lisboa, 1924－33、4 Vols. 邦文は前掲山田『南海香薬譜』400－401ページ。
(28) 前掲『トメ・ピレス　東方諸国記』357ページ。
(29) Diogo de Couto, *Da Asia de Diogo de Couto dos feitos, que os Portuguezes fizeram na conquista, e descubrimento das terras, e mares do Oriente.* Lisboa, 1778、15 Vols. 邦文は前掲山田『南海香薬譜』371ページ。
(30) 前掲『トメ・ピレス　東方諸国記』348ページ。
(31) 前掲山田『南海香薬譜』405ページ。
(32) *Cartas de Afonso de Albuquerque, seguidas de Documentos que as elucidam.* Lisboa, 1884－1935. 7 Vols. Vol. III. pp. 5 －12.　邦文は生田・池上訳注『ジョアン・デ・バロス　アジア史II』大航海時代叢書、第II期第3巻、岩波書店、1981年、補注437ページ。
(33) N. M. Penzer ed., *op. cit.*, p.84.
(34) 前掲『トメ・ピレス　東方諸国記』357ページ。
(35) 前掲『ジョアン・デ・バロス　アジア史II』補注435－436ページ。
(36) 前掲『トメ・ピレス　東方諸国記』495ページ。
(37) 同上書、114ページ。
(38) 同上書、116ページ。
(39) 前掲『ジョアン・デ・バロス　アジア史II』437ページ。
(40) 前掲『トメ・ピレス　東方諸国記』116ページ。
(41) 同上書、62－63ページ。
(42) 同上書、113ページ。
(43) 同上書、116ページ。
(44) 同上書、64ページ。
(45) 同上書、72ページ。
(46) 同上書、173ページ。
(47) M. N. Pearson, *Merchants and Rulers in Gujarat,* Univ. of California Press, 1976. 邦訳M. N. ピアスン著生田滋訳『ポルトガルとインド――中世グジャラートの商人と支配者――』岩波書店、1984年、19ページ。
(48) 前掲山田『南海香薬譜』376－378ページ。

(49) 前掲山田『南海香薬譜』406ページ。

(50) 前掲『トメ・ピレス　東方諸国記』346ページ。

(51) マラッカ王国の構造と性格に関する本章の叙述に当っては、和田久徳「マラッカ王国の海上貿易」『大航海時代叢書Ⅴ　月報5(第2次)』岩波書店、1973年1月、1－4ページ、に依拠する所が多かった。

(52) Brian Harrison, *South-East Asia —— A Short History,* London, Macmillan, 1964. 竹村正子訳『東南アジア史』みすず書房、1967年、66ページ。

(53) 前掲『トメ・ピレス　東方諸国記』462－463ページ。

(54) 同上書、411－412、414ページ。

(55) 前掲和田久徳「マラッカ王国の海上貿易」4ページ。

(56) 前掲邦訳『ポルトガルとインド』12ページ。